

延辺自治州雑記

須賀 努

八月十六、二十三日まで亜細亜大学アジア研究所の調査団に同行し、吉林省延辺朝鮮族自治州を訪問した。先ずは北京駐在の人間に、このような機会を与えて頂いたことを深く感謝したい。これまで数多くの中国国内調査、出張を繰り返してきているが、今回のような多彩な顔ぶれ（大学、行政、企業、マスコミ）、実に奥の深い質問、熱気溢れる調査を見たことがない。

特に中国駐在組のミッションではあり得ない朝鮮専門家である野副団長、鈴置日経編集委員、真田愛知淑徳大学教授から発せられる朝鮮語とその鋭い質問内容。そこに我々北京語組が、中国国内事情に照らして補足をするという構図は実に新しい調査の仕方ではなかったろうか。一般のミッションでは到底得ることの出来ない貴重な情報を数々収集できたのは嬉しい限りである。

さて、その調査地である延辺朝鮮族自治州であるが、我々中国に住む日本人にとっては、極めて遠い所との意識があったが、実際訪れてみると北京から飛行機で僅か二時間。夏休みの行

楽シーズンとあって、航空券の手配が大変なほど賑わっていた。一方朝鮮研究家の方々からは『北朝鮮に一番近い場所』との位置付けと聞き、見る位置が変われば変わるものだと感心した。

延辺の中心地、延吉の街を歩いていて驚いたことは、意外なほどデパートや市場が多いこと。覗いて見ると、有名ブランドから、北朝鮮・ロシアの海産物、日本や韓国の製品が溢れていた。地元の人が『南の深圳 北の延吉』と呼ばれるほど消費が盛んだ、と胸を張っていたのにはビックリ。工業の未発達なこの地で如何なるカラクリかと見れば、海外出稼ぎ者の送金が多いのだとか。

そもそも朝鮮族自治州という名前であるから、朝鮮族が多く住む地域（現在は人口の37%）。中国の朝鮮族は少数民族の中でも最も教育水準が高く、また歴史的な背景もあり中学から日本語を勉強するなど、日本語能力の高い人材を多数輩出している。しかし残念なことにそれらの人材に十分な職場が提供できず、地理的な

繋がりに韓国や日本に働きに行く人が多いようだ。この外貨送金が馬鹿にならない額と云うことだ。

今回訪問した延辺大学では、『日本語学科の志望者が減っている。日系企業は日本語人材をもっと雇用して欲しい。』との声を聞いた。この地に進出している日系企業は数十社、それも比較的小規模。実際現場へ行くと、『ワーカーは漢族、中間管理職は朝鮮族』といった体制が多かった。朝鮮族は向上心が強く、ワーカーでは満足できない、との声を聞き、海外流出の意味を知った。

中国には多くの少数民族が存在するが、漢族の上に立つて働いているケースをあまり見ることがない。中央政府も東北振興政策及び西部大開発の一環としてこの地を重視し、鉄道・道路の整備を急ピッチで進めているのだが、単純な経済活性化だけが目的ではあるまい。ロシア、北朝鮮と国境を接する微妙な位置にある上に朝鮮族が暮らす複雑さが見え隠れしていた。

その北朝鮮であるが、この地に長く住み北との仕事もしてきたと言う日本人から生の声を聞くことが出来たことは収穫であった。『北の利権構造は複雑。政府と党、軍と保衛（秘密警察）が利権を分け合っており、商売は簡単ではない。この構造によりトップに万一のことがあっても簡単には崩壊しないのでは。』『人民にはまだ余裕があり、大規模暴動の気配はない』。聞いている内に、何だか二〇数年前の中



延吉の中国系銀行の広告（韓国向け送金10分で届きます）

国を思い出していた。ああ、北朝鮮とは時間の止まった昔の中国なのだ、との認識を強くした。

しかし不思議なのは中国の態度。中国でも昔は外資が進出する際役所をたらい回しされ、地方政府の都合の良いように扱われ、不当な費用徴収なども横行し、進出の弊害であった（一部は現在でも残っている）。その中国が北朝鮮で港湾や鉱山の権益を確保したものの、実際には資金を取られるばかりで、事業は進んでいないとの話を聞き、正直首を傾げた。二〇年前の中国と同じ事をしようしている国に対して、そんなに無防備に資金を供出するものであろうか？

深読みし過ぎかもしれないが、この件を見る限り中国は将来北朝鮮を丸呑みしようとしているとも推測できる。

今回の視察のポイントとして北朝鮮、ロシアと国境を接している吉林省延辺朝鮮族自治州が労働契約法、企業所得税法改正、輸出税還付率の低下などで限界が見えてきている沿岸地域の受け皿として機能するのか、というものがあった。労働力という点でコストは比較的安く、日系企業にとっては言語も入り易い。州政府の強力な支援もあり、土地の確保も容易、琿春には日本工業園も計画されている。

反面物流は琿春、ザルビノ（ロシア）、ソクチョ（韓国）、新潟と言う航路が開設されている。四力国に跨る事もあり、不安定要素を残している。現時点では陸路で大連まで運び、そこから海路を取る為、輸出には限界がある。

日系企業には少しハードルの高い場所であるが、韓国系はかなり進出していた。延吉の中国系銀行では『韓国ウォン送金、十分で届きます』と言った広告を大々的に出していたが、そのニーズは高いのであろう。

また中国系は内陸部と同様、正に安価な労働力と税金メリットを求めて進出してきた。中国系企業にとっては税の優遇は国からのプレゼント、原材料などの調達が容易であれば直ぐに進出して来る。しかしメリットが薄ければ直ぐに他の場所を探す。地元としては出来れば長



図們大橋（中朝国境線）

期安定的に物事を考える日系企業の進出が望まれるのであろう。

視察のクライマックスとして、琿春郊外防川のゴールドントライアングル（中国、北朝鮮、ロシアの三国国境）を訪れた。展望台から見渡す左のロシア、右の北朝鮮領にはいずれも建物一つなく、極めて平穏な風景であった。この三国の政治的な安定、政策上の透明性が確保された時、この地はその価値を發揮するものと思われるが、今はまだ中国の一边境都市の位置付けから脱することは出来ない。

（すがつとむ・三菱UFJ信託銀行北京代表処）